

Y15a 特別支援学校・養護学校における出前授業の実施

布施 哲治（国立天文台）

国立天文台では2010年度から、天文学や関連分野の研究・開発を行う職員及び元職員が講師となり、小・中学生を対象とする出前授業「ふれあい天文学」を実施している。全国の小・中学校や夜間中学、ろう学校、院内学級や特別支援学校等に出向くほかに、海外の日本人学校や補習授業校に向けたオンライン授業も行っている。

2025年度の発表者は、視覚障がい者教育を行う埼玉県立特別支援学校塙保己一学園と、肢体不自由のある児童生徒が在籍する北海道真駒内養護学校の各中学生を対象とする授業を担当した。当日の前半は授業日の夜の星々を解説し、後半は宇宙を調べる道具に関するアクティビティの時間とした。

塙保己一学園では全盲と弱視の生徒が参加した。プレゼンはテレビモニターに加え、弱視の生徒の手元にあるタブレットにも表示して、各自で拡大表示して確認できるようにした。自分たちの目で星を見た経験がないこと、全盲の生徒は外界の明るさを感じ取れないことなどから、言葉の表現には最大限の配慮を行った。後半のアクティビティでは、(1) 星の位置を凹凸にした簡易星座早見盤により、星の並びを指で確認した、(2) 弱視の生徒は小型望遠鏡を用いて遠方の景色を自分たちの目で眺めた、(3) 小型パラボラアンテナの上から落としたボールが真ん中に集まる様子を弱視の生徒は顔を近づけて目視し、全盲の生徒は手を添えてボールの軌道を確認した。

真駒内養護学校では車椅子に乗っている生徒がほとんどであったことから、後半のアクティビティでは生徒の状態に合わせて適宜工夫を行った。

特別支援学校や養護学校における授業では、言葉の表現への配慮だけでなく、アクティビティにおいては児童生徒の状態に合わせた様々な工夫が必要であることが確認できた。